

モードは語る

中野 香織

人が生むホスピタリティー

イタリア生まれでバルセロナを拠点とするパオラ・ゲイス氏は、高級住宅を短期休暇向けに最適化する国際コンサルティング会社を率いる。彼女は日本にも約1カ月滞在。その時に感じた日本のラグジュアリーホスピタリティーについて聞いた。

彼女は欧州系ファッションブランド幹部の薦めで、金沢の老舗旅館「金城樓」や京都のブティックホテル「The Shinmonzen」など多くの隠れた名所を訪問。そこに儀式や伝統が息づき、瞑想（めいそう）的ともいえる静謐（せいひつ）があったと語る。



日本の職人技や伝統、文化を惜しみなく称賛するパオラ・ゲイス氏

西洋とは異なる贅沢（ぜいたく）感到に圧倒され、凝縮されたおもてなしで時の流れすら忘れる没入感を体験

日本のラグジュアリー

した。「人が生み出すホスピタリティー」の力を再認識したという。

繊細な職人技や伝統を守る姿勢、季節の移ろいをおもてなしに織り込む文化は、日本がラグジュアリー大国である証しになっている。パオラは「日本は『本物の卓越性は時間をかけてこそ育まれる』と、私たちに教えてくれる」と称賛する。

一方、「日本のラグジュアリーは完成形に近いが、まだ課題も潜む」とパオラは指摘する。その一つがデジタル面の遅れだ。技術立国と見られがちな日本だが、多くの宿泊施設

で古いウェブサイトや粗い写真しかなく、現地で体験できる至高の時間が伝わってこないという。「日本には強化の余地がある」と分析する。

日本はラグジュアリーの本質である「意味と感情の創造」を、体現している。デジタルでの表現やストーリーテリングをさらに磨けば、その価値はより広く遠くまで伝わるはずだ。同時に、過熱するインバウンド（訪日外国人）の光景を見て思う。あえてデジタルを質素にし、実際に足を運んでくれた人だけに予想を超える驚きと喜びを用意する……。デジタルの遅れを装いつつ、そんな奥ゆかしさを美德とする道もまた、日本の「いけず」な贅沢感の表現だったりするのかもしれない、と。